海が呼んだ話

小川未明

青空文庫

一

自転車屋のおじさんが、こんど田舎へ帰ることになりました。清吉や、正二にとって、親しみの深いおじさんだったのです。三輪車の修繕もしてもらえば、ゴムまりのパンクしたのを直してもくれました。また、その家の勇ちゃんとはお友だちでもありました。おじさんは、犬や、ねこが好きでした。いい人というものは、みんな生き物をかわいがるとみえます。

勇ちゃんは、こんど田舎の小学校へ上がるといいました。

「勇ちゃん、田舎へいくのうれしい？」

「お友だちがなくて、さびしいや。僕も、お母さんも、いきたくないんだよ。」

「どうして、田舎へいくの。」

「おじいさんが、だんだん年をとって、もう一人で田舎におくことができないからさ。おじいさんは、東京へくるのは、いやだというのだ。そして、昔から住んでいるところにいたいというので、しかたなくお父さんが、帰ることにしたのだよ。」

勇ちゃんの話を聞いて、清吉も、正二も、勇ちゃんのお父さんを親孝行だと思いました。

「この家へは、親類の叔父さんが入るのだから、僕、また遊びにくるよ。」と、勇ちゃんはいいました。

「叔父さんのお家は、どこにあるの。」と、正二が、聞きました。

「叔父さんの家は、ここから二十里もあちらの浜なんだ。たいだの、さばだの網にかかってくるって、僕のお父さんが、いった。」

「その叔父さんは、また自転車屋をやるの。」と、清吉がたずねました。

「さあ、それはわからないな。」

勇ちゃんの話しぶりでも、遠い浜から、町へ出てくるには、なにか子細があるように感じられたのです。しかし、そのわけは、わかりませんでした。ただ、にぎやかな町から、さびしい田舎へ帰るものと、また、ひろびろとした海の生活から、せまくるしい町へやってこなければならぬものと、人間の一生の暮らしには、いろいろの変化があるものだと、子供たちにも、感ぜられたのでした。

勇ちゃんの家が、田舎へ引っ越してしまってから、しばらく、自転車屋のあとは、空き

家になっていました。

「いつ、勇ちゃんの叔父さんは、引っ越してくるんだろうな。」と、正二も、清吉も、閉まっている家の前を通るたびに、振り向きながら思いました。そのうちに大工が入って、店の模様を変えたり、こわれたところを直したりしていましたが、それができあがると、いつのまにかこざっぱりとした、乾物屋になりました。そして、チンドン屋などがまわって、開店の披露をしたのであります。

海産物のほかに、お茶や卵を売っていました。おじさんというのは、まだ若く、やっと三十をこしたくらいに見えました。それにひとり者で、いつも店にさびしそうにすわっていました。

「おじさん。」といって、清吉や、正二や、ほかの子供たちが、じきに遊びにいくようになったのも、一つは、勇ちゃんの叔父さんだったというので、まったく他人のような気がしなかったからでもありましょう。

なんでも珍しいことを知りたがる子供たちは、この店へやってくると、

「おじさん、海の話をしてよ。」といいました。

「は、は、は。」と、無口のおじさんは、笑っています。

「おじさんは、海の底へ入ったことがある？」と、正二が、聞きました。
「は、は、は。海の中へは、毎日のように入ったし、小さな舟に乗って、遠くへ釣りにいったこともある。」と、おじさんが、答えました。
「正ちゃん、おじさんは、海へくぐるのが、名人だって。そして、さんごや、いろんな貝や、魚など、なんでも手で取ってくることができるんだって、いつか勇ちゃんがいったよ。」と、清吉がそばからいいました。
「え、おじさん、ほんとう？」
「うん、ほんとうだ。」
「海の中、どんなだい。美しい？　水の中では、息ができないだろう。」
「舟から、機械で空気を送るんだねえ、おじさん。」
「そうなんだよ。海の中は、明るくて、きれいさあ。」と、おじさんが、答えました。
「どんなに、きれい？」
「そうだな、青白く、ぼうっとして、ちょっと口にはいえないなあ。」
「いろんな魚が泳いでいるの。」
「うん、上の方には、くらげが、傘のような形をして、泳いでいるし、すこし下の岩陰

には、たこが腕組みをして、考え込んでいるしな。もっと下の方へいくと、赤い魚だの青い魚だのいろいろのやつが、まるで林の中をくぐるように、藻の間をいったり、きたりしているのだ。」

「ふうん、きれいだな。水族館へいってみたようなんだね。」

「水族館って、まだ見たことがないが、たぶん同じものだろうよ。」

「おじさん、それでも、海よりか、町のほうがいいの？」

「それは、海のほうがいいさ。」

「そんなら、なぜ、町へ越してきたの？」

こう、子供たちが問うと、おじさんは、それには答えずに、ただ、さびしそうに、笑っていました。

勇ちゃんの叔父さんは、年が若く、口数は少なかったけれど、まじめでありましたから、町の人たちもだんだんこの店をひいきにするようになりました。

二

ある日のこと、清吉のお父さんは、勇ちゃんの叔父さんが、海の生活をやめて、こちらへくるようになったわけを、外から聞いてきたのであります。

「清吉、こんな話は、あまり人にするでないぞ。お父さんが、あるところで聞いてきたのだからな。」

「怖ろしい話？」

「清ちゃん、だまって、聞いていらっしゃい。」と、そばから、姉さんがいいました。

「ある日のこと、沖合いで、汽船が衝突して、一そうは沈み、ついに行方不明のものが、八人あったそうだ。あの人は、海へくぐる名人だってな。それで、たぶんその船といっしょに沈んでしまったのだろうから、中へ入って、死骸をさがしてくれと頼まれたのだ。」

「あのおじさん、入ったのかい。」

「だれも、底が深いし、気味悪がって、いい返事をしたものがないのを、あの人は、一人で入ったのだ。」

「えらいなあ。」

「えらいとも。」

「いいから、清ちゃん、だまって聞いていらっしゃい。」と、お姉さんが、またいいました。

「あの人は、降りていって、船室の内へ入って、さがしたそうだ。けれど、一人の死体も見つからない。おかしいなと思ったが、上がってそのことを報告した。すると、いやそんなはずはない。船といっしょに沈んだのだから、船室の内にいるに相違ないというので、あの人は、また海の底へもぐったのだ。」

「怖ろしいなあ、おじさん、気味が悪くなかったろうか。」

「見つかったんですか。」と、いっしょに、お父さんの話を聞いていらしたお母さんが、いいました。

「また、船室へ入って、すみからすみまで、懐中ランプで照らして、さがしたけれど、やはり一人の死体も見つからない。まったくおかしなことがあるものだと思って、あきらめて出ようとしたとたん、ちょっと上を見ると、八人の死体が、ぴったりと天じょうについて、じっと自分の方を見下ろしていた。このときばかりは、さすがに、あの人もぎょっとして、もうすこしで後ろへひっくり返りそうになった。それから、潜水業というものが、いやになって、陸で暮らしたいという気が起こったという話なんだよ。」

お父さんの話は、終わりました。

聞いていたお母さんも、お姉さんも、清吉も、

「そうだったでしょうね。」と、そのときの、おじさんの気持ちに、同情されたのでありました。

清吉は、このことを、おじさんの店へ遊びにいっても、けっして、口にはしなかった。おじさんが、そのときのことを思い出すと悪いと思ったからです。

三

自転車屋の後へ乾物屋ができてから、二か月ばかりたつと、勇ちゃんの叔父さんは、不思議な病気にかかりました。それは、ふいに原因のわからぬ熱が出て、手足がしびれてきかなくなるのでした。とりわけ、西の空が夕焼けをする、日暮れ方に熱が出るというのであります。そして、近所の医者に見てもらったけれど、なんの病気かわからないというのでした。このことが、また近所のうわさになったのです。

「勇ちゃんの叔父さん、きょう病院へいったよ。」と、正二が、いいました。

清吉と正二は、学校の帰りに、乾物屋の前を通ると、おじさんが、店にすわっていました。二人は、入ってそばへ腰かけました。

「おじさん、顔色がわるいね。」

「病院へいって、見てもらってきたの？」

おじさんは、二人の子供の顔を見て笑いながら、

「海が、おれを呼ぶんだよ、子供の時分から、水をもぐってきたものが、陸へ上がりきってしまうと体がきかなくなって怖ろしいことだな。」

「そんなら、おじさん、また海へ帰るの。」

「ああ、海へ帰って、もぐりたくなった。そうすれば、体もじょうぶになるということだ。そうしたら、二人とも遊びにきな。浜は風があって、夏は涼しいぜ。えびでもたこでも、新しい魚を食べさせるから。」

「おじさん、このお店はどうするの。」

「この家か、また前の人たちがきて入るだろう。やはり、急に町から、田舎へいっても暮らしが立たないのだよ。」と、おじさんが、いいました。

「そんなら、また、勇ちゃんと遊べるんだね。」と、正二は、にっこりしました。店を

出ると、

「僕、おじさんに別れるの、悲しいや。」と、清吉は、歩きながら、正二をかえりみて、いいました。

とんぼが、飛んでいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　12」講談社
　　1977（昭和52）年10月10日第1刷発行
　　1982（昭和57）年9月10日第5刷発行
底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス
　　1940（昭和15）年4月
初出：「日本の子供」
　　1939（昭和14）年7月
※表題は底本では、「海《うみ》が呼《よ》んだ話《はなし》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2016年6月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海が呼んだ話

小川未明

２０２０年　７月１８日　初版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/